

教室に於ける戦後14年間の 乳糜尿症の統計的観察

長崎大学医学部皮膚科泌尿器科教室 (主任: 北村精一教授)

助教授	野 北 通 夫	助手	岡 田 実 茂
	の ぎた みち お		おか だ さね しげ
副 手	清 水 泰	副 手	前 山 直 彦
	し みず やすし		まえ やま なお ひこ

長崎大学風土病研究所臨床部 (主任: 片峰大助教授)

助手	西久保 国 雄	助手	吉 村 税
	にしくほ くに お		よし むら おさむ

A Statistical Observation on Chyluria Cases in Our Clinic for Fourteen Years after the Second World War. Michio NOGITA, Saneshige OKADA, Yasushi SHIMIZU and Naohiko MAEYAMA Dept. of Dermatology and Urology, School of Medicine, Nagasaki University (Director: Prof. S. KITAMURA) Kunio NISHIKUBO and Osamu YOSHIMURA Clinical Dept. Research Institute of Endemics, Nagasaki University (Director: Prof. D. KATAMINE)

教室の乳糜尿症については既に昭和10年駒屋教授が第24回日本泌尿器科学会総会の宿題報告を担当された際、大正3年9月より昭和9年8月に至る20年間の214例について整理し、さらに昭和14年第40回九州医学会の宿題報告で北村(包)教授がこれを加えた昭和14年8月に至る満24年間の368例について詳細な報告を行っている。

われわれはこゝに昭和21年より34年にいたる戦後14年間の316例の統計的観察を中心に大正3年9月以降今日に至る46年間の乳糜尿症の推移をうかがった。

(ただ昭和19, 20年の記録は原爆のためなくなっているのではこの両年ははぶいた)

教室46年の乳糜尿症の推移 (表1, 図1)

大正3年9月より昭和34年12月に至る46年間に皮泌尿科教室、並に風土病研究所を訪れた乳糜尿患者は戦前30年間の529例と戦後14年間の316例の計845例で(男子586例, 女子259例)で、全般的にみて本症は昭和9

年以降急激に増加し、昭和18年には戦前、戦後を通じての最高値(46例, 外来患者の2.04%)に達している。戦後では、昭和21年はわずかに1例に過ぎないが、その後年を追って増加し、昭和26年には戦後の最高値(39例, 1.85%)をかぞえ、以後は多少の増減はあるが今日なお相当の高値を保持している。

昭和9年以降かくも急激に患者の増加したことに対し北村(包)教授はこれをこれよりさき昭和5年に開始された腎盂内注入療法の知識の地方の人々への普及と関係づけているが、この昭和5年から18年にかけての患者数の最も多かった戦前14年間の381例に比べ戦後14年間の316例は数の面では少々減少していることは確かであるが、昭和4年以前の16年間の148例に比べると2倍以上にも当り、輒近の地方に於ける専門医の増加から考えると、予防対策の進歩によりフィラリア症は減少しつつあるかも知れないが、乳糜尿症そのものは必しも満足出来る程減少していないのではないかとさえ臆測される。

表 1

大正3年9月より昭和34年に至る46年間の
乳び尿患者の推移(昭和19・20年欠如)
合 586, 女 259

年度	患者 総数	乳び 尿	%	年度	患者 総数	乳び 尿	%
大正3 (前9月)	412	1	0.24	11	1855	24	1.29
4	1414	3	0.21	12	1869	22	1.18
5	1511	8	0.53	13	1955	39	1.99
6	1556	16	1.03	14	1750	30	1.71
7	1506	10	0.66	15	1695	34	2.01
8	1607	5	0.31	16	1985	32	1.61
9	1703	14	0.82	17	2012	41	2.04
10	1684	8	0.48	18	2256	46	2.04
11	1568	16	1.02	21	1786	1	0.06
12	1764	15	0.85	22	1692	17	1.00
13	1864	7	0.38	23	1874	11	0.59
14	1826	14	0.77	24	1938	30	1.55
15	1787	6	0.34	25	2013	23	1.14
昭和2	1703	13	0.76	26	2106	39	1.85
3	1733	2	0.12	27	2218	19	0.86
4	1711	10	0.58	28	2235	28	1.25
5	1731	9	0.52	29	2909	27	0.93
6	1564	17	1.09	30	3204	32	1.00
7	1669	11	0.66	31	3272	24	0.73
8	2019	17	0.84	32	3202	19	0.59
9	1977	34	1.72	33	3443	33	0.96
10	1919	25	1.30	34	3771	13	0.34

(自大正3年至昭和9年は駒屋, 井上, 森により昭和14年迄は北村, 二神, 堀口, 一ノ瀬, 片峰による)

戦後14年間の乳糜尿症

戦後14年間の乳糜尿患者316例の年度別, 性別, 病型別の頻度並びに各年度の泌尿器患者数に対する百分率は表2及び図2に示す。

各年度の患者数は昭和26年の39例を最高に, 昭和21年の1例を最低に平均23名弱であり, 泌尿器患者数に対する百分率では最高昭和28年の4.95%, 最低21年の0.3%で平均3.34%である。

病型別頻度

肉眼的に単に乳糜様白濁にとどまるもの214例(67.7%), 血液を混ざるもの102例(32.3%)で, 駒屋教授の214例中前者が67例(31.4%), 後者が147例(68.6%)で後者が前者の約2倍に当たるとは全く逆の関係にあり, 単純な乳糜尿患者が血乳糜尿患者の2倍を占めている。北村(包)教授らの成績でも前者が117例(32.2%), 後者が170例(46.8%), 両者交錯するものが76例(20.9%)で, 後2者を合わせるとわずかに前者が増えているとはいえ殆んど駒屋教授の場合と同じである。勿論診察時肉眼的に血液を混じなかったものでも, 結局は量の問題で, ある時期には血様混濁を示し得ることの可能性は充分考えられるが, 上記の数字だけから見ると或は最近では血乳糜尿は次第に少なくなって来ているのではないかと考えられる。

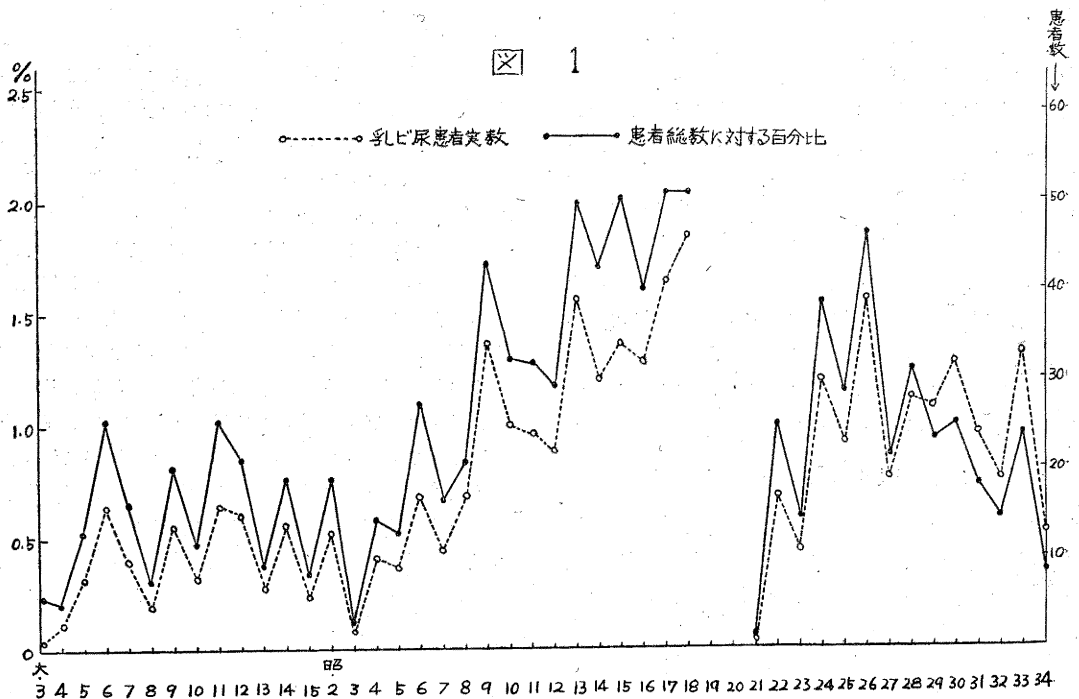


表 2
戦後14年間 (昭21~34) の乳ビ尿統計

年次	泌尿器患者総数	乳ビ尿患者		百分比
21	334	C. 1 H. 0	1 { 0 ♀ 1	0.30%
22	579	C. 13 H. 4	17 { 9 ♀ 8	2.94
23	622	C. 9 H. 2	11 { 7 ♀ 4	1.77
24	985	C. 16 H. 14	30 { 21 ♀ 9	4.38
25	955	C. 14 H. 9	23 { 16 ♀ 7	3.51
26	820	C. 31 H. 8	39 { 26 ♀ 13	4.76
27	822	C. 13 H. 6	19 { 14 ♀ 5	2.31
28	566	C. 18 H. 10	28 { 18 ♀ 10	4.95
29	882	C. 15 H. 12	27 { 13 ♀ 14	3.06
30	981	C. 18 H. 14	32 { 15 ♀ 17	3.26
31	682	C. 12 H. 12	24 { 15 ♀ 9	3.52
32	652	C. 14 H. 5	19 { 10 ♀ 9	2.91
33	679	C. 28 H. 5	33 { 14 ♀ 19	4.86
34	495	C. 12 H. 1	13 { 5 ♀ 8	2.63
計	9454	C. 214 H. 102	316 { 183 ♀ 133	3.34

C=Chylurie

H=Haematochylurie

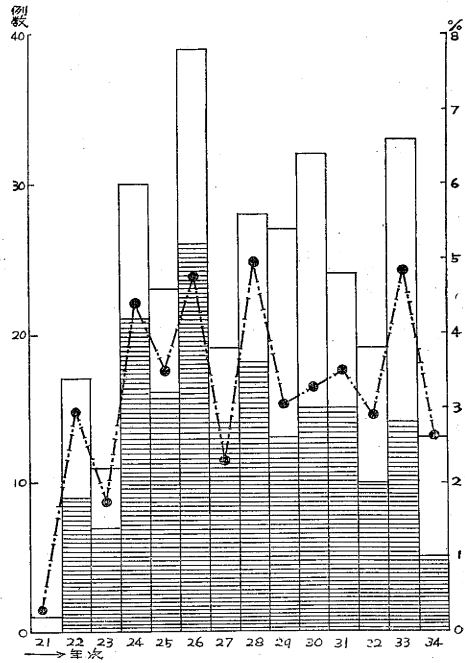
性別的頻度

男子183例 (57.9%) に対し女子は133例 (42.1%) で稍々男子に罹患率が高いが、これも駒屋教授の男子172例 (80.4%)、女子42例 (19.6%)、すなわち4:1の男女比及びこれに次ぐ北村(包)教授の男子282例 (76.6%)、女子86例 (23.4%)、すなわち3.3:1の男女比に比べると甚しい懸隔がある。しかし両教授時代の男女比の推移、さらには北村教授の統計以後昭和18年迄の男子121例に対する女子40例、すなわち3:1の比率を考慮するとき、外来を訪れる乳糜尿症の男女差は年を追って次第に縮まって来つゝあると言ってもさしつかえなからう。

求診年令別頻度 (表3, 図3)

男子では最年少4才、最年長79才、女子では夫々17才、77才で、全体的に50代を頂点に前後に向って減少し、50, 40, 60, 30, 20, 70, 10代及びそれ以下の順であり、性別的には50, 60, 20代では圧倒的に男子が多く、30, 40, 70代では女子が稍々多い。これを駒屋、北村教授時代の31~40 (96例)、41~50 (70例)、

図 2
各年度別例数 (男子 ▨, 女子 □)
並びに
泌尿器患者総数に対する百分率 ●- - - ●





21~30 (65例)、51~60 (62例)、61~70 (34例)、11~20 (26例)、71~80 (4例)、10才以下 (1例) の順に比べると丁度40代を軸に、頂点を30代から50代に、曲線の山を左から右に折り返した状態にある。この様に以前には30代を中心にして山が何故に戦後では50代に移ったか、これが解釈も決して容易ではないが、北村(包)教授らも発病曲線と求診曲線の頂点の間には10~20年のずれのあることをあげ、本症の持久性を指摘している様に、或はかかる点に戦前、戦後のこの様な求診年令別頻度の相違を説明する鍵が匿されているのではなからうか。

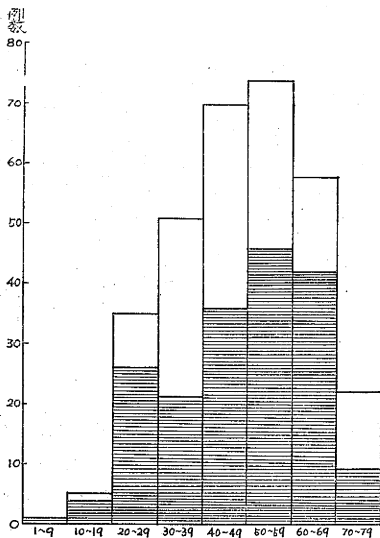
初診、再来別頻度 (表4)

初診 276例中未だ全然治療を受けたことのないもの242例 (87.7%)、他の病院で治療を受けたことのあるもの34例 (12.3%) で、後者の中24例 (70.6%) は一応治癒したが再発、9例 (26.4%) は癒らないまゝわれわれの外来を訪れたものであり、再来患者40例中再発例は31例 (77.5%)、持続例は7例 (17.5%) であり、316例の全例中再発乃至全然癒らないまゝ外来を

表 3 年 令 別 類 度

性 \ 年	1~9	10~19	20~29	30~39	40~49	50~59	60~69	70~79	計
合	1	4	26	21	34	46	42	9	183
♀	0	1	9	30	36	28	16	13	133
計	1	5	35	51	70	74	58	22	316

図 3
 男性  女性 
 合 最高79才, 最低4才
 ♀ 最高77才, 最低17才



訪れた患者数は74例, 23.4%で本症の難治, 持久性を物語っている。

表 4 初 診 再 来 別

初 診	未 治 療		34
	再 発	持 続	
再 来	再 発	24	34
	持 続	9	
	不 明	1	
	再 発	31	
再 来	持 続	7	34
	不 明	1	
	再 発	2	

患者の地域的分布 (表 5)

316例中県内居住者299例 (94.6%), 県外及び未記載者17例 (5.4%)で, 県内居住者だけについて言うと長崎市を含めた西彼地区が159例 (50.3%)で患者の大半を占め, これに島原市を含めた南高地区の42例 (13.3%)が続く, 以下南松 (五島) 地区の39例 (12.3%), 諫早市を含めた北高地区の28例 (8.9%), 佐世保市を含めた北松地区の19例 (6.0%), 大村市を含めた東彼地区の11例 (3.5%), 壱岐地区の1例 (0.3%)の順で, この順位は略々駒屋教授の夫れと類似している。なお長崎市内在住患者91例中五島その他県内県外のフィラリア流行地と目される地域に居住したことのあるものが18例をかぞえている。

表 5 患 者 分 布

長 崎 県 内	壱 岐 郡	1	0.32%
	北 松 浦 郡	14	4.43
	佐 世 保 市	5	1.58
	南 松 浦 郡	39	12.34
	東 彼 杵 郡	5	4.43
	大 村 市	6	1.90
	西 彼 杵 郡	68	21.52
	長 崎 市	91	28.80
	北 高 来 郡	9	2.85
県 外	諫 早 市	19	6.01
	南 高 来 郡	36	11.39
	島 原 市	6	1.90
県 外	佐 賀 県	7	2.22
	宮 崎 県	1	0.32
	岐 阜 県	1	0.32
	天 草 郡	3	0.95
	不 明	5	1.58

マイクロフィラリア検出率 (表 6)

血中のマイクロフィラリア検査を行った140例中陽性はわずかに12例(8.6%)に過ぎず、残りの128例(91.4%)は陰性である。相当数の記載もれのあることから考えて必しもこの値がそのまま真実を伝えているとも思えないが、駒屋教授の陽性率55/105(52.3%)、北村(包)教授の65/126(50.8%)に比べると余りに懸隔があり過ぎる。

このことは各種粗大寄生虫に有効なアンチモンコロイド剤やピペラジン剤が用いられる様になって仔虫はもとより或は母虫も亦滅殺される様になったことに最大の原因があることは論を俟たないが、他面長い年月の間には自ら母虫も亦器質化した淋巴管組織内に埋没、死滅し、仔虫の生産も止み、唯その後遺症としての乳糜尿症がわれわれの外來を訪れているのではなからうか。殊に戦後風土病研究所の行いつつあるフィラリア対策の成果を思うときこの感が深い。

表 6 ミクロフィラリア

陽	性	12
陰	性	128
不	明	176
計		316

患側別頻度 (表 7)

患側を明記せるものは症例の約半数の152例に過ぎないが、この中両側性のものが64例(42.1%)、左腎のみが55例(36.2%)、右腎が33例(21.7%)で、北村(包)教授の左腎89例(59.7%)、右腎60例(40.3%)でわずかに左腎に偏重する点ではこれと一致するが、北村教授が偏側149例(86.6%)に対し両側23例(13.4%)で両側性罹患の極めて少いことを強調しているに対し、戦後症例では夫々57.9%と42.1%でその差は必しも大きくない。

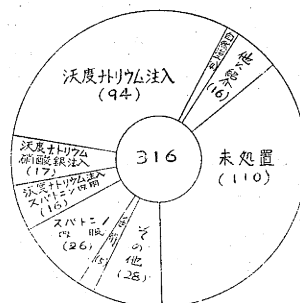
表 7 患側別頻度

患側	性別			計	%
	♂	♀			
左側	29	26	55	17.4	
右側	16	17	33	10.4	
両側	39	25	64	20.3	
不明(記載もれ)	99	65	164	51.9	

治療状況

未処置乃至他の診療機関に治療をゆだねた126例を除いた190例に対して行った治療を一括すると図4の如くで、就中沃度ナトリウムを主とする腎盂内薬液注入

図 4 治療



療法を行ったものが圧倒的に多く、スパトニン内服療法乃至は両者の併用がこれに次ぎ、少数例ではあるが腎周囲淋巴管除去手術を行ったものもある。

個々の療法の成績は表8, 9, 10, 11, 12に示す。

表 8 沃度ナトリウム注入 (94例)

全治42例(44.68%) 平均治療回数7.55回

回数	1	2	3	4	5	6	7	8	10	12	13	14	15	16	25
例数	3	1	3	5	7	2	6	1	4	3	2	2	1	1	1

軽快21例(22.34%) 平均治療回数5.90回

回数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	15
例数	1	1	1	7	3	1	1	1	2	1	1	1

不明31例(32.97%) 平均治療回数3.97回

回数	1	2	3	4	5	6	7	10	14	16
例数	11	3	4	4	3	1	1	2	1	1

表 9 沃度ナトリウムと硝酸銀液注入 (17例)

例数	転帰		
	全治	軽快	不明
17	11	3	3
%	64.71	17.65	17.65
平均治療回数	沃ナ 5.27回 硝酸銀 4.82回	8回 5回	11回 3.3回

表 10

沃度ナトリウム注入とスパトニン内服乃至注射(16例)

転帰	全 治	軽 快	不明
例 数	10	5	1
%	62.50	31.25	6.25
平均治療回数, 量	沃ナ 7.22回 スパトニン 12.5g;7.2本	10.67回 34.4g	5回 4本

表 11 スパトニン内服 (26例)

転帰	全 治	軽 快	不 変	不 明
例 数	7	2	8	9
%	26.92	7.69	30.77	34.62
平均治療量	10.73 g	8.73 g	17.05 g	

表 12 そ の 他 の 治 療

- 腎周囲淋巴管除去清浄術 5例——全治 5
- スパトニン注射 4例——全治 3 (平均23本), 不変 1 (12本)
- アンチモンコロイド注射 (8回) 1例——全治
- 沃度ナトリウム注入 (10回), ゴルステチボサン注射 (22回) 1例——全治
- スパトニン内服, 注射併用 (16日) 1例——全治
- 沃度ナトリウム (11回), スパトニン注射 (16回), コムニン (11回), ステチボサン (13回) 1例——全治
- 食塩水及び沃度ナトリウム注入2例——全治1, 不明 1
- 硝酸銀注入 3例——全治 1 (4回), 不明 2
- ブロームナトリウム注入 (2回) 1例——不明
- 沃度ナトリウム (3回), 食塩水 (2回), 硝酸銀 (2回) 1例——全治
- 沃度ナトリウム (2回), 硝酸銀 (1回), ブロームナトリウム (2回) 1例——全治
- 食塩水, ブロームナトリウム 2例——全治 2例 (平均 1.5と3.5回)
- 沃度ナトリウム (5回), 硝酸銀 (2回) 注入とステチブナル注射 (13回) 1例——不明
- 沃度ナトリウム (7回), マファルゾール(0.54g) 注射 1例——不変
- ゾルステチボサン注射 (18回) 1例——不変

- スパトニン (9^{Tab}×4, 12^{Tab}×18)内服, ステブナル注射 (11回) 併用 1例——不明
- 沃度ナトリウム (8回), イスラピン (5回), 硝酸銀 (5回) 注入 1例——全治
- 食塩水注入 3例——全治 1, 不明 2
- 食塩水注射, カチーフ注射又はトロンボゲン注射 2例——全治 1, 不明 1
- 自然治癒——4例
- 未処置——110例
- 他へ紹介——16例

これらの成績を一括表示すると表13の如くで、最も正確なものは腎周囲淋巴管除去手術で、中2例に術後患側は治癒したが反対側の腎より乳糜尿の排泄をみたものもあるが一応全例 (5例) が根治している。ただ本法は患者にとっては相当の侵襲であるだけに簡単に

表 13 治 療 効 果 総 括

処置別	効果	全 治	軽 快	不 明	治 癒 率	有 効 率
薬液腎盂内注入		61	24	40	48.8%	68%
注入+内服~注射		12	5	3	60.0%	85%
内 服 ~ 注 射		13	2	21	36.1%	41.7%
腎周囲淋巴管摘除		5	0	0	100%	100%
自 然 治 癒		4	0	0	/	/
総 計		95	31	64	50%	66.3%

行えないのが難点である。次に良いのは沃度ナトリウム, 硝酸銀その他の薬液の腎盂内注入療法とスパトニンその他の薬剤の内用との併用で、治癒率60%, 軽快例を加えた有効率は85%で、薬液の腎盂内注入だけでは治癒率, 有効率夫々48.8%, 68%で少々劣り、最も成績の良くないのはスパトニンその他の内用のみで治療したもので治癒率36.1%, 有効率41.7%であるが、これは乳糜尿の発生機序から考えて当然の帰結と言うべきであろう。

自然治癒の4例は入院, 安臥せるため又は膀胱洗滌等で一応乳糜尿の排泄をみなくなったものである。

最後に入院治療と通院治療との治癒率を比較してみると、一応治療を行った190例中入院加療した119例では治癒63, 軽快25例で、治癒率, 有効率は夫々 52.94%, 73.95%であるに対し、通院治療者 71例では治癒

32, 軽快6例で, 夫々45.07%, 53.52%で, やはり入院加療したものの方に治癒率, 有効率共に高い(表14).

表 14 治療状況一覽

入 院 119	治癒	63
	軽快	25
	不変 不明	31
外 来 71	治癒	32
	軽快	6
	不変 不明	33

未処置及び他所に紹介 126

ま と め

昭和21年より34年に至る戦後14年間に訪れた乳糜尿症316例について統計的観察を試み, あわせて大正3年9月以降今日に至る46年間の乳糜尿症の推移をうかがい, 統計面にあらわれた戦前, 戦後の相違について2, 3の考察を加えた。

得られた成績を要約すると次の如くなる:

1) 46年間の乳糜尿症は戦前の529例と戦後の316例の計845例で, うち男子586例(69.3%), 女子259例(30.7%)であり, 本症は昭和9年以降急激に増加し, 昭和18年には戦前, 戦後を通じての最高値(46例, 泌尿器患者の2.04%)に達し, 戦後は昭和21年の1例より次第に増加, 昭和26年に至って戦後の最高値(39例, 1.85%)を占め, 爾後は多少の増減はあるが依然可成の高値を保持しており, 最も患者の多かった戦前の14年に比し患者数は必しも著しくは減少していない。

2) 戦後14年間の316例については

a) 臨床型としては乳糜尿214例, 血乳糜尿102例で前者が後者の約2倍を占め, 戦前とは全く逆の関係にある。

b) 性別では男子183例(57.9%), 女子133例(42.1%)で稍々男子に罹患率が高いが戦前に比べると著しく男女差が少くなっている。

c) 求診年令別では50, 40, 60, 30, 20, 70, 10代及びそれ以下の順に低く, 戦前の30代を中心とした山が戦後では50代中心になっている。

d) 初診276例, 再来40例で, うち未治療242例(76.6%), 治療後再発乃至病状持続せるもの74例(23.4%)。

e) 患者の地域的分布では県内居住者299例(94.6%), 県外その他17例(5.4%)で, 市部を含めると西彼地区159例(50.3%), 南高地区42例(13.3%), 南松地区39例(12.3%), 北高地区28例(8.9%), 北松地区19例(6.0%), 東彼地区11例(3.5%), 彦岐地区1例(0.3%)である。

f) 血中マイクロフィラリア陽性度は被検140例中わずかに12例(8.6%)で, 戦前の陽性率50%以上に比べると著しく減少して来ている。

g) 患側を明記せる152例中, 両側性64例(42.1%), 左側55例(36.2%), 右側33例(21.7%)である。

h) 治療中最も確実なのは腎周囲淋巴管除去手術で施行全例治癒。腎盂内薬液注入とスパトニンその他の内用との併用(治癒率60%, 有効率85%), 腎盂内注入単独(48.8%, 68%)がこれに次ぎ, スパトニンその他の内用療法だけのものが最も悪い(36.1%, 41.7%)。

i) 入院加療せる119例では治癒63例(52.94%), 通院治療71例では治癒32例(45.07%)で, 軽快例をあわせると有効率は夫々73.95%, 53.52%でやはり入院加療せる者の方に成績が良い。

要之, 戦前, 戦後を比べると本症にも色々な面で移り変りというものはうかがえるが, 現在なお本症は戦前に比べ, 決してわれわれが考えている程著しく減少してはいない。

フィラリア対策は言う迄もなく病原虫の媒介者である蚊の撲滅と共に仔虫保持者ばかりでなく非感染者をも含めて流行地の住民を集团的に徹底的に治療することにある。かくすることによって一方では新たな感染が防ぎ得ると共に他面では既にフィラリアに感染した人々も器質的变化の起る以前に体内の病原虫を滅殺し, 本症の発生を未然に防ぎ得よう。

全国的に徹底的なフィラリア対策が講ぜられつつある戦後の趨勢からみれば, 極めてやつかいな乳糜尿症もやがて近い将来にはわれわれの外来から影をひそめて行くのではなからうか。

(擱筆するに当り御校閤を賜った北村, 片峰両教授並びに統計に御協力をいただいた皮膚科教室の森講師, 田中, 深町助手に深謝する)

参 考 文 献

- 1) 駒屋銀次, 井上 昇: 乳糜尿症. 皮尿誌, **38**, 298—317 (昭10)
- 2) 井上 昇, 森 武: 我教室に於ける 過去 20年間
の乳糜尿及血乳糜尿症の統計的観察. 長崎医学会誌,
13, 548—577 (昭10)
- 3) 福田千代太, 吉崎籟三: 最近 1 年間に於ける乳糜
尿症の統計的観察. 皮尿誌, **46**, 192—193 (昭14).
- 4) 二神義清, 堀口勇蔵, 西本勝之輔, 一ノ瀬健吾,
片峰大助: 乳糜尿368 例の統計的観察. 日泌会誌,
29, 96—103 (昭15)

Summary

A statistical observation was done on 845 cases of chyluria treated in our clinic for the years from 1914 to 1959. Especially, 316 cases among them treated for fourteen years after the Second World War were examined in detail. There were 586 male patients and 259 female among all cases. The cases showed a sudden increase in the number in 1934 and amounted to maximum in 1943. Immediately after the War it temporarily decreased and then rapidly increased, now coming up to the prewar level.

Concerning the 316 cases treated after the War, there were 102 cases of haematochyluria and other chyluria, being reverse to its ratio seen in the prewar time. The female patients were 133, being superior in the number to it before the War. The age distribution of treated patients was showing a preponderance in thirties before the War, but in fifties after it. The distribution of the patients in Nagasaki prefecture was found at the highest in Nishisonogi District, and the further order of frequency of them was as follows: Minamitakagi, Minamimatsuura, Kitatakagi, Kitamatsuura, Higashisonogi and Iki Districts. The incidence of microfilariae in the blood was found at 12/140 (8.6%), remarkably decreasing in percentage, compared with it of 50% and over in prewar days.

Regarding a lesion of the kidney, it was observed in the left on 55 cases (36.2%), in the right on 33 (21.7%), and in both on 64 (42.1%). Among the treatments which were done, the lymphangiectomy around the kidney proved to be most successful, and infusion into the pelvis of 1.5%~2.0% sodium iodide solution or 1.0%~3.0% silver nitrate solution, combined with peroral administration of diethylcarbamazine, was found to be effective in some extent.

Speaking in general, the treatment was more effective in inpatients than in outpatients.

(Author)